

# フランス革命期におけるアカデミー批判言説とその廃止の経緯について<sup>1)</sup>

隠岐 さや香

## はじめに

本稿の目的は、フランス革命期における諸科学と芸術全般を担った王立諸アカデミーの一举廃止という出来事を通じて、近代的な民主主義と国民国家のあり方が模索された時期に、学術組織の独立性が社会といかなる緊張関係を体験したのかを考察することである。

フランス革命においては旧体制に属する様々な諸制度が廃止されたが、王立諸アカデミーの廃止は、急進勢力とされるモンターニュ派が優勢となった1793年8月8日に起きた。廃止されたのはアカデミー・フランセーズ（文芸）、科学アカデミー（自然科学）、碑文文芸アカデミー（歴史・考古学）、絵画彫刻アカデミー（美術）、建築アカデミー（建築）、そして音楽アカデミー（主に歌劇）であった。続く9月15日の政令には各地の大学と中等教育機関であったコレージュ（collèges）の廃止が記載された<sup>2)</sup>。その一方で、王立植物園と王立コレージュ（現コレージュ・ド・フランス）というかつて「王立」であった一部の研究・教育組織だけは廃止を免れた。

しかし、モンターニュ派が失脚した後の1795年には、音楽アカデミーを除く四アカデミーに道徳政治科学アカデミーを加えた五部門が国立学士院（Institut National）という一つの組織の中に復活している。そのため、あたかも混乱の渦中に突然過激な決断がなされ、そのあと軌道修正されたかのような印象を与える。事実、8月8日の出来事について、複数の先行研究がそのように解釈できる記述を行ってきた。たとえば、科学アカデミー史のR. ハーンはその古典的著作において、同日に科学アカデミーのみを残存させるための交渉が進展していたが、画家のジャック・ルイ・ダヴィド（Jacques-Louis David）による「アカデミーの制度全体に対する怒りに満ちた熱情的な演説」がそれまでの議論を覆ってしまったとしている<sup>3)</sup>。近年にアカデミー・フラ

ンセーズの歴史を記述したM. P. フィッツィモンも、ダヴィドが「代議士たちに諸アカデミーを自由な社会と矛盾したものとして葬り去る」ように説いたあと、すぐに一举廃止の結論が出たとしている<sup>4)</sup>。ダヴィド自身が所属していた絵画彫刻アカデミーの歴史記述となると、さすがに彼の演説の背景については比較的詳しく記述される。ただし、それがなぜ他分野のアカデミーをも巻き込んだ政治決定へとつながったのかについて、説得力のある説明は管見の限りまだ見当たらない<sup>5)</sup>。

フランス革命がイデオロギーによる文化破壊を伴う「タブラ・ラサ」の出来事だとする歴史記述には、近年見直しが加えられている。王政期の制度を解体した革命政府は、最も粛清が吹き荒れた時期であっても改革の連続性を意識していたし、王権や教会から没収した不動産や物品の詳細な目録を作り国有化や売却を行う程度には計画性を維持していた<sup>6)</sup>。筆者もそのような視点に立ち、諸アカデミーの廃止という経緯の背景にも、一貫した論理に基づく行動があったはずだと考える。

このような問題意識から、本稿では改めて1793年8月8日に至るまでの議論の経緯と当日の審議の詳細に可能な限り立ち返る。また、従来の研究では、個別アカデミーの歴史としてこの問題が記述される傾向が強かったので、分野横断的な視点を取り入れることで、部分的にでもその克服を目指す。具体的な手順について述べると、まず、前史として革命初期の公教育改革論に現れた王立諸アカデミーの閉鎖を願う言説の特徴とその歴史的背景を概観する。その上で、アカデミー廃止の決議がなされた経緯を詳細に振り返る。とりわけ、前述のダヴィドが所属した絵画彫刻アカデミーの動向と、残存を支持する声が残った科学アカデミーとを対比する形で検証を行う。そして最後に、政治的決定による全てのアカデミー廃止という、王政期ですら起きなかった大胆な決断、すなわち学術組織の独立性を完全に否定する決定が、何故、史上初の民主的な体制にお

いて生じたのかという問題について考察を行う。

## 公教育改革論における高等教育・研究組織批判

現在主流となっているフランス革命史の解釈によると、フランス革命は基本的に旧来の制度を一掃した上で全てを再生 (régénération) させる思想に基づき行われた。それはまず、政体 = 憲法 (Constitution) をどう考えるかという当初の議論から愚直なまでに一貫して引き継がれた特徴であった。すなわち、来るべき体制はイギリスのように古来より続く王制をその政体の礎とするのではなく、独立したアメリカのごとく無から憲法 (Constitution) をもって新たに作り上げるものとされたのである<sup>7)</sup>。教育についても同様の考えが採られ、全ての王立のアカデミーは公教育改革の一環として、一旦は廃止されることが既定事項だった。

ここで、教育機能のない王立アカデミーまでもが「公教育」(instruction publique) の問題に属するものとされたことを不思議に思う読者もいるかもしれない。踏まえておくべきは、この時、「研究」(recherche) という概念がまだ定まっていなかったということである。確かに科学アカデミーには学者 (savant) がおり、彼らは新しい理論や法則の発見を行っていたし、碑文文芸アカデミーの学者たちも古代の碑文を解説していた。だが、当時はそれらの活動を「研究」という抽象概念で呼び習わす習慣はなかったし、教育と研究を非連続的に捉えるのも一般的ではなかった。そのため、全てが新しい教育のための議論において論じられることとなったのである<sup>8)</sup>。ただし、旧制度に由来する組織の廃止が果たしていつなのかは決められていなかった。また、初等教育についてはその必要性を否定する人はいなかったが、高等教育及び研究を担う組織については、どの程度の組織が作られるべきかについて関係者の間で温度差があった。このような状況の中、革命前から存在していた諸アカデミーに対する批判論が一定の影響を持つことになる。

王立アカデミーという組織は、自然科学分野や俗語を用いた文献を扱う歴史学、文芸など、当時の大学では十分に教えられない諸分野の探究を行う場であり、とりわけ自然科学に関して言えばパリの科学アカデミーはヨーロッパで最先端の研究活動が行わ

れる場であった。オペラ、絵画彫刻などの芸術、文芸や歴史考古学など、他の諸アカデミーでの探究についても、細かい部分を除けば当時のフランスがおおよそその先端的水準を保っていた。そのため、大学のように、その教育内容が当時の先端的学問の内容に合致していない、あるいは職業的要請に即した内容でないといった批判を受けることはなかった。すなわち、アカデミーに関する批判は「遅れ」についてではなく、エリート主義のあり方を問うものだったのである。

アカデミーは全てが一括して批判対象となる傾向があり、その批判にはおよそ二つの論点が含まれていた。一つは、王立アカデミーが才能のある人に開かれておらず凡庸な人の居場所になっているというもの、もう一つは、貴族的で高尚だが有用性の疑わしい特定の領域が優遇され、不当な身分格差の温床となっているという分野間対立の混じった批判である。そして、批判者の関心ごとに最も槍玉にあがる組織はありつつも、一つのアカデミーの悪癖を他も共有しているという見方がたびたび示された。

革命初期の1790年には既に国民議会に全てのアカデミーを廃止すべきとの匿名の意見文書が寄せられている。また、ヴェルサイユの匿名の住人により寄せられたある意見文書では、アカデミー・フランセーズが碑文文芸アカデミーを生み、絵画彫刻アカデミーが建築アカデミーを生み、アカデミーが次々と増殖したとの認識が示されており、当時の人々は組織の連関性を意識する傾向の強かったことが窺える。

ただし、先行研究の示唆するところによれば、革命の初期で最も風当たりが強かったのはアカデミー・フランセーズであるようだ。フランス語辞典の編集で知られるアカデミー・フランセーズは1635年に設立された最も古く伝統ある組織で貴族会員の割合も多く、それだけに強い非難の寄せられる傾向があった。既に1790年8月20日の憲法制定国民議会の審議においてアカデミー・フランセーズの廃止を提案した議員がおり、同日に決まった各アカデミーの同年予算配分では25217リーヴルという最も少ない予算しか与えられなかった<sup>9)</sup>。対して碑文文芸アカデミーは43908リーヴル、科学アカデミーに至っては93458リーヴルを獲得している<sup>10)</sup>。この費用の差は、アカデミー・フランセーズが他のアカデミーとは異なり会員に固定取入としての年金を約束して

いなかったことも大きい。だが、経済的な利得を得られない組織であるにもかかわらず、知的な威信の象徴とみなされる傾向があり、選ばれない者の執着を招いていたのも事実である。何度か機会を逃した末、1746年に席を勝ち取ったヴォルテールはその典型である<sup>11)</sup>。

対して、科学アカデミーは少なくとも革命の初期であれば、議員たちからはむしろその有用性を評価される傾向にあった。それが証拠に1790年時点でも手厚い予算配分を受けている。また、1791年には政府が目指した度量衡改革（メートル法制定）のための委員会を創設し、その経費として新たに更に10万リーヴルの特別予算を約束されてもいる<sup>12)</sup>。科学アカデミー会員には1789年にパリ市長となったバイイヤ、1791年に代議士および後述する公教育委員会の議長となったコンドルセ侯爵（Nicolas de Condorcet）、議会に多くの知人を持ち、財務統計の整備に尽力したラヴォワジエ（Antoine-Laurent de Lavoisier）など、革命初期に活躍した顔ぶれが少なくないこともその背景にあっただろう。ただし、科学アカデミーそのものは多くの批判層を抱えていたこともよく知られている。先行研究が指摘するのは、論文あるいは発明品の評価を科学アカデミーに依頼して評価されなかった著者・作者たちの怒りである。この点について補足しておく、当時、科学アカデミーに論文あるいは書物の草稿を送り、アカデミーの認可（approbation）を得ることは学者にとって名誉であった。また、特許（patente）の制度が確立していなかった旧体制下では発明品に国王が「特権」（privilège）を与えて製作者を保護する仕組みがあり、科学アカデミーは王権からそのための審査を請け負った組織の一つだった。

18世紀後半になると、科学アカデミーの批判者たちは重なり合う二つの集団を成していく。一方は、当時の科学アカデミーで主流となっていた数理科学的アプローチや定量的な実験科学に反感を抱く人々である。彼らは主に『百科全書』の編者ドニ・ディドロやジャン・ジャック・ルソーが示した科学観を支持し、定性的な観察による自然誌や化学実験を愛好する傾向があった。その典型例は、革命期に政治ジャーナリストとして活躍したジャン・ポール・マラー（Jean Paul Marat）である<sup>13)</sup>。彼は1791年にはアカデミー批判の著書を出版していた<sup>14)</sup>。もう一方の集団は、学者に自身の作り出した機械などの発

明品を審査されることを拒み、同業者に審査されることを望む職人（artisans）や起業家らである。とりわけパリにおける職人層は、1790年以降、前述のハーンが「職人圧力集団」とまで呼ぶほどに、独自の政治的要求で活気づいていた。彼らは発明品が王の与える「特権」により守られていた従来のシステムを廃して、職人たち自身が発明を審査し、特許を与えるための職人技芸審査局（Bureau de consultation des arts et métiers）他、いくつかの新組織を作ろうとしていたのである。しかし科学アカデミーの学者はそれに対抗し、内務大臣を介して交渉を行った。そして1791年9月には職人技芸審査局の審査員に多数のアカデミー会員が参加することが決まり、むしろ技術行政における同アカデミーの発言権を強めることに成功していた。それゆえ職人たちの反発は高まっていた<sup>15)</sup>。

詳述した二つのアカデミーに比較すると、絵画彫刻アカデミーとそれに対する批判者のあり方は異色といえる。何故なら、革命期の芸術において中心的な役割を果たしたダヴィドその人が、同アカデミーの会員でありながら、アカデミー体制の最も熱心な批判者であったからだ。彼は既に1790年9月には、若い芸術家および建築家300名と共に芸術コミュン（Commune des arts）というアカデミーの枠を超えた勢いある集団を結成していた。注目すべきは、この芸術コミュンが、科学アカデミーを批判した革命的な職人たちと社会階層的には近い関係にあったことである。事実、科学アカデミーが職人技芸審査局に統制を強めた折に、彼らは職人たちと連帯して批判声明を出している。なお、artistesの語が当時は芸術家と発明家、どちらの意味にも使い得たことからわかるように、両方の集団を行き来する市民も実際には少なくなかった<sup>16)</sup>。

ダヴィド個人の反アカデミー思想は、彼がなかなか同アカデミーのローマ賞を受賞できず苦しんだことや、彼の弟子たちの不遇に由来するといわれる。その理想は、才能ある全ての人に芸術を開くことと、王制から芸術が自由になることであった。彼は1791年8月21日には既に、それまで王立絵画彫刻アカデミーが独占してきたルーヴルのサロンを全ての芸術家に開放してほしいと国民議会に要求し、それを実現させている。また、その時既に王立絵画彫刻アカデミーの廃止にも言及している。だが、当時はまだ時期尚早であるとして退けられた。しかし、モ

ンターニュ派が台頭すると、ダヴィドと芸術コミュニティの関係者は王政期を表す彫像や装飾の破壊活動も含めた「愛国者」としての運動にも参画していく<sup>17)</sup>。

以上、網羅的とはいえないが、革命の中で批判を受け沈黙しがちなアカデミー・フランセーズ、革命に協力しながら組織外部の批判者と対峙する科学アカデミー、内部関係者に政治を通じて揺さぶりをかけられる絵画彫刻アカデミーといった、三者三様のあり方に触れてきた。アカデミーの廃止に至るプロセスには、このうちの後二者が目立って言及されることになり、他のアカデミーの事情はさほど記録からは見えてこない。だが、それについて詳述する前に公教育委員会での議論の経緯についても触れておきたい。

科学アカデミー終身書記であったコンドルセは1791年10月30日、立 法 国 民 議 会 (Assemblée nationale législative) の公教育委員会議長に選出された。彼による最初の具体的な公教育制度構想「公教育の全般的組織についての報告と法案」は半年ほど後の1792年4月20日から21日にかけて発表された。その内容は、初等教育としての「初等学校」、中等教育に「中等学校」、「学院」(Instituts)、「リセ」(Lycées) という四段階の教育を想定した上で、更に五段階目として、公教育を監督し研究も行う「国立学術院」(Institut National) を位置付けるものであった。諸学と技術の発展に貢献するとされるこの国立学術院は、実質上、諸アカデミーの後継組織として想定された。旧体制期との違いは、執行権力に対する学術団体の独立性が明記されていたことである。旧体制期であれば学校は教会の影響下にあり、アカデミーについては王が選挙で選ばれた候補に対し、任命拒否などで影響力を行使しようようになっていた。それに対し、コンドルセ案では学校の教員を教育関係者が選び、アカデミー会員は同等の会員による選挙で選ばれるのであり、行政はそこに関与できないとされたのである。コンドルセによれば、これは全ての市民が宗教を含め、思想的に完全に自由であるために必要な措置であった<sup>18)</sup>。

コンドルセの公教育案は後世からすると近代的と評価しよう内容であったが、発表のタイミングが悪かった。同日にフランスは国王一家の逃亡を手助けしようとした王妃の故郷、オーストリアに対して宣戦布告しており、議場は騒然として、公教育につい

て議論するどころではなかったのである<sup>19)</sup>。また、個別的な事情を付け加えると、ジロンド派に近かったコンドルセと急進的なモンターニュ派との関係も、同時期の1792年4月には既に悪化していた。当時、モンターニュ派はジロンド派のブリッソらを王党派のラファイエットに近かったとの理由で攻撃していたのだが、そこでコンドルセが、ロベスピエールらに資金不正の疑いありとの新聞記事を書き、モンターニュ派から恨みを買っていたのである<sup>20)</sup>。そしてロベスピエールは同月29日、ジャコバンクラブでコンドルセとそれに連なる人々を批判する演説を行った<sup>21)</sup>。なお、当時はまだジロンド派とモンターニュ派とが共にジャコバンクラブに属しており、両者が直接対峙する形での発言であった。

ロベスピエールの批判は主に、コンドルセなどヴォルテールの伝統に連なる「フィロゾフ」達を、王侯貴族と仲良くしていた裏切り者として描き出すものであった。彼は同時に、ジャン・ジャック・ルソーこそが真の哲学者であると主張した。

ダランベールとその友人達が司祭どもと戦い、小馬鹿にしていたとしても、彼らはしばしば王や大貴族達と懇意にしていた。私は、これら偉大なるフィロゾフ達が、J. J. ルソーにおける徳、天才、自由を執拗に迫害したのでなければ、異議を唱えることなど何もないのだ。この繊細で徳高い哲学者 [ルソー]、それは私の意見では、この時代に有名な全ての人々の中で唯一、崇拜の榮譽に値する人物であるが、その崇拜の榮譽ときたら政治的詐欺師たちや、軽蔑すべきおべっかい使い達に媚びを売った陰謀により汚されている<sup>22)</sup>。

この引用ではロベスピエール自身の個人的な反感が強く出ているものの、「偉大なるフィロゾフ達」がルソーのような自由な天才を迫害したと述べるくだりに着目したい。この批判はアカデミー批判のそれと同型である。

既に反王党派と王党派のあいだで対立は深まっていたが、1792年8月10日に革命は決定的な局面を迎える。議会がパリの民衆に包圍され、突き上げを受ける形で王権の停止が決定したのである。王党派とみなされた貴族たちは一斉に国外逃亡し、先に王党派から民衆に対する暴力があったパリでは、王党派

に対する路上での報復的な暴動が相次いだ。

混乱の最中、9月17日には新たな議会として国民公会（Convention Nationale）が結成され、新しい議員が選出された。この時、下野していたロベスピエールが議員に返り咲いたが、多数派となったのはジロンド派であり、政治的主導権はまだモンターニュ派にはなかった。ゆえに継続して代議士となったコンドルセやアカデミーの関係者も一定の影響力を保持していた。ただし、公教育委員会にはモンターニュ派側の関係者が新規の委員として着任した。ダヴィドもその一人であった。

### 王立諸アカデミー閉鎖の経緯

王立アカデミー一挙廃止については、前述のように1793年夏の国民公会における議論を参照するのが常であった。とりわけ科学アカデミー史においては、科学アカデミーの存続を測ろうとした穏健派のグレゴワール神父と、それに対峙し一律廃止を訴えて場の空気を支配した画家ダヴィドの議論とを対比的に紹介する傾向があった<sup>23)</sup>。だが、ダヴィドは何故かくも強い主張を行ったのか。何故他の議員たちがそれを受け容れたのだろうか。その経緯を少し丁寧に追いかけてみたい。

既に見たように、1791年以降、ダヴィドは一貫して絵画彫刻アカデミー廃止のために行動していた。国民公会が始まって間もない1792年11月11日にも、彼は議場に「絵画彫刻と建築の諸アカデミー団体が廃止される」こと、ただし関連分野教育の学校は維持されるべきことなどを求める「複数の市民芸術家（artistes）」からの要望書を届けている。またその時、自身の絵画彫刻アカデミー会員資格証明書を不要なものとして差し出すパフォーマンスも行っている。この要望書はダヴィド自身が所属する公教育委員会に転送された<sup>24)</sup>。

公教育委員会の議事録には、更に踏み込んだ内容が見られる。11月21日付で「[[公教育委員会の]ある委員がパリにおける絵画彫刻アカデミーの内部運営に様々な目に余る行為が紛れ込んでいることを観測した」と、具体的な出来事への告発がなされているのだ。このある委員とはダヴィドのことであり、その場で実態調査のための委員として、モンターニュ派のジルベール・ロム（Gilbert Romme）が任命された<sup>25)</sup>。

次の記録は11月24日付けであり、ロムが通報された「目に余る行為」の調査結果を報告している。その内容は、王立絵画彫刻アカデミーが、その関連機関であるアカデミー・ド・フランス（Académie de France）の院長選出人事を行ったことを糾弾するものであった。説明を補足すると、アカデミー・ド・フランスとは絵画彫刻アカデミーにより派遣された若手画家が、芸術の修行や研究のためイタリアのローマに滞在するための組織である（フランス語の洗練を図るアカデミー・フランセーズとは別組織であることに注意されたい）。そのアカデミー・ド・フランスの院長が、1793年11月20日に、監督元である王立絵画彫刻アカデミーにより選出されていた。事実関係としてはそれだけなのだが、それに対して憤る人々がいたのである。事実、27名の芸術家（artistes）たちが「反憲法的（inconstitutionnel）な振る舞い」であるとして非難し、11月24日付けで同院長職を廃止する要望書を作成していた。要望書は、その院長選出が「非合法的」なものであり、「人間の諸権利と平等の軽蔑」に値するとまで述べていた<sup>26)</sup>。

一方、絵画彫刻アカデミー側の記録を確認する限り、手続き上の瑕疵は特に見当たらないようにみえる。まず、当該の院長職人事が行われたのは、前任者のフランソワ・ギヨーム・メナジョ（François-Guillaume Ménageot）が健康の問題を理由に辞職を申し出たからであった。そのため、内務大臣がパリの絵画彫刻アカデミーに院長選挙の正式の許可通告を行った上で、会員投票により過半数を占めた候補者が院長に選出されたのである。また、旧体制期とは異なり、投票の平等性に細心の注意が図られた様子も窺える。

しかしながら、批判者たちからはそもそもアカデミーが旧体制期のような通常運営を行ったこと自体が問題であるとの主張がなされた。彼らによれば既にアカデミーは違憲的存在であり、移行措置として暫定的に存続を許されているだけであるため、勝手に人事を行う権利はないという。また「共和国を支持するための戦時における自由と節約の原理」に基づき義憤に駆られたとの文言も並び、アカデミー運営に伴う出費が問題視されていたこともほめかされている。

ところで、署名した27名の「芸術家」の身元については、パリ在住とあるほかは管見の限り不明であ

る。名前から推察して絵画彫刻アカデミーの関係者の可能性がある者は1名しかいない<sup>27)</sup>。ダヴィドが芸術コミュニンの関係者と連帯し、機会を窺って行動を起こしたと解釈するのが妥当だろう。いずれにせよ、まだ廃止されていない組織が独立に行った人事に対して、外部から干渉が試みられていたことになる<sup>28)</sup>。

話を戻すと、この日の調査者であったロム自身の報告書も、一貫して絵画彫刻アカデミー断罪の調子に貫かれていた。冒頭から「複数の芸術家たちが絵画と建築の諸アカデミー〔訳注：複数形〕の廃止をあなた方〔議員たち〕に求めてきた」との言葉から始まっており、公教育委員会内部では「調子を和らげること」が求められたほどの内容であった。

立法者達よ、あなた方は恐らく、アカデミーという名の、その多くは人間精神の進歩への愛よりも宮廷の虚栄と野望に奉仕するために作られたものである社団が、[...] フランス革命をまたもや侮辱している様を心痛と共に眺めているであろう。[...]

あなた方の委員会は、部分的な破壊を行ってはいらないと考えている。そして、フランス中の全てのアカデミーに対して同じ一撃が加えられるべきだと考えている。だが、あなた方が公教育の一般的な組織化に関わっている限りにおいて、委員会としては、それら幾つかのアカデミーに依存している教育部門のために、あるいはそれら組織の保護下にある貴重な事物の保全のためや、それらの幾つかのアカデミーに委任された重要な作業のためにも、何らかの措置を講じた時にしか、そうしてはならないと考えている。諸科学と諸技芸が致命的な衝撃を受けることにならないように、あなた方は再設立が可能なときにしか打ち倒すことをしてはならないのである。

だが、それらの不安定な権威による行き過ぎた振る舞いを、あなた方が制止することも重要である。とりわけ、彼らが技芸を害することで、我々の革命をも害することができるときには<sup>29)</sup>。

ただし、ロムの演説にはアカデミーの廃止を求める主張の一方で、「諸科学と諸技芸」の存続は尊重したいという発想も同時に現れている。モンター

ニュ派なりに学問や芸術を尊重する発想はあり、ただしアカデミーという組織には一切の信頼がなかったと解釈するべきだろう。

翌11月25日に国民公会から発布された政令では、ローマのアカデミー・ド・フランス院長職の廃止が宣言された（第1条）のみならず、フランスにおける全てのアカデミー新規会員採用の一時停止（第2条）も決定された<sup>30)</sup>。すなわち、署名した芸術家たちの希望通りに、旧体制期を引き継ぐアカデミーのあらゆる人事が一時停止されたのである。

ロムは更に、翌月の12月20日、公教育委員会で本来の業務でもある「公教育に関する報告」を行っている。それはコンドルセが提案した公教育案のうち「初等学校」、「中等学校」、「学院」、「リセ」という最初の四段階を比較的忠実に引き継ぎつつも、第五段階目に相当する「国立学術院」、すなわちアカデミーに相当する段階を削除した内容であった。同報告ではその理由は明白にはされていない。だが、時局の緊迫と財政難に伴い、以後の公教育委員会における議論は高等教育に相当する部分を省略した内容へと傾斜していく。また、ロムがこの時打ち出した新しい論点として、知性的能力としての精神(esprit)に関わる「知育」(instruction)と、美德(vertus)に関わる「徳育」(éducation)との違いの強調があった。これを受けて公教育委員会の議論も、国民共同体の形成のための道徳教育の必要性と、そのための具体的な初等教育のあり方を中心とする内容へと特化していく<sup>31)</sup>。

全アカデミーの会員募集停止は、関係者にとって恐らく衝撃的な決定であった。そして、各種史料からわかる限りでは、この決定に最も直接的に抗ったのが科学アカデミーの関係者である。だが、そのことに触れる前に、科学アカデミー側の動きで目立つものを見ておこう。1792年11月25日、科学アカデミーは国民公会に代表を送り、度量衡改革のための調査事業について説明をしている。年末から年始になると、国王ルイ・セーヌとその家族の裁判および処刑という大問題が生じていたためか関連する記録は乏しい。少し日が空いて1793年4月5日には、科学アカデミーが戦時の義援金として国庫に4万リーヴルほどの寄付をしたとの記載がある。資金は科学論文の賞金や望遠鏡製作にあてられていた費用から賄ったようだ。このように、国家に対する貢献と忠誠を示す行動を積み重ねる一方で、科学アカデ

ミーは当時の様々な政治決定に対して訴えを行っていた。たとえば、会員の実質上の収入であった「年金」(pension)が王政期の遺制であるとして廃止にされかけた問題や、約束された予算の未払い問題に関して政府に要求を行うラヴォワジエの書簡が同じ期間に数多く残されている<sup>32)</sup>。

1793年5月15日、ラヴォワジエの訴えを代弁する形で、公教育委員会委員の一人である代議士のジョゼフ・ラカナル (Joseph Lakanal) が、前述した全アカデミー会員募集停止決定の破棄を要求した。ラカナルの主張は、科学アカデミーが人手不足に苦しんでおり、それゆえに政府から請け負った度量衡改革やアッシニャ紙幣の改訂、火薬製造研究、戦闘での負傷者を輸送する方法の検討といった様々な事業にも悪い影響が出ていると主張するものであった。また、それに加えて科学アカデミーが「15人の会員を職人技芸審査局に供給している」ことの大変さにも言及されていた。後者は先に述べたように、革命急進派の職人たちに反感を買っていた事象である。だが、モンターニュ派の影響力が強まっていたものの、ジロンド派がまだ多数を占めていた国民公会においてはラカナルの訴えがすぐに功を奏した。二日後の5月17日には全アカデミーにおける新規会員募集の再許可が降りている<sup>33)</sup>。

ところで、この時期にはダヴィドも前述したローマのアカデミー・ド・フランスの若手画学生たちの身の上で起きた問題に対応していた。1793年1月、反フランス革命感情を持つローマ市民により同アカデミーの関係者が襲撃され、死傷者が出て建物も破壊される事件が起きていたのである<sup>34)</sup>。そのため、派遣されていた画学生たちは一斉帰国を余儀なくされたのだが、留学の中断により通常なら受け取れたはずの滞在用給付金を絶たれてしまった。そこでダヴィドが公教育委員会を通じて、彼らのための給付金を継続して欲しいとの要望を政府に提出したのである。具体的な政令案も付随するその訴えは、ちょうどラカナルの演説と同日の5月15日に行われていた。だが、国民公会はダヴィドの訴えに対してはすぐに対応しなかった<sup>35)</sup>。

しかしながら、事態はその後に急変する。国民公会の勢力図を決定的に塗り替える出来事が起きたのである。まず、6月2日にパリにおけるサン・キュロットの武装集団 (パリ・コミューン) が国民公会を取り囲み、この時敵対していたジロンド派の逮捕

を要求した。騒然とする中、勢いに乗じたモンターニュ派が反対勢力のほほいしない議場で強行裁決に踏み切り、ジロンド派は一斉に「反革命的」との嫌疑をかけられ訴追対象となってしまった。これにより、コンドルセも (厳密にはジロンド派ではなかったのだが) この時に姿をくらまし潜伏生活に入った<sup>36)</sup>。

モンターニュ派に敵対する勢力が一掃された国民公会においては、「諸アカデミー、諸科学は専制政治の道具となっていた」として、学者を貴族制と結びつけて批判する強い調子の演説がなされるようになっていく<sup>37)</sup>。だが、実際に組織を廃止する切っ掛けは、理念的というよりは具体的で些細な出来事一端を発していたように見える。まず、6月28日に、公共税制大臣と絵画彫刻アカデミーの間で、後者が王政時代に受け取っていた各種レント (rentes) の扱いをめぐる解釈の違いがあることが国民公会で報じられた。要は、王政期から引き継がれた同アカデミーのレントは、政府が自由に処分できる国有財産であるか否かという問題を法的に解釈する必要が生じていたのである。そこで大臣は公教育委員会にこの問題についての見解を求めた。

7月1日になると突然、国民公会は絵画彫刻アカデミーの廃止について公教育委員会に検討することを命じ、しかも期限を一週間と定めている<sup>38)</sup>。また、同日にはダヴィドが再びアカデミー・ド・フランスの若手画学生に対する特別給付金について演説を行ったのだが、それは、あたかも王権の組織を解体すれば若手救済に資金を共給出来ると示唆するような内容であった。彼はアカデミー・ド・フランスが年間4-5万リーヴルを必要とする組織であり、同アカデミー院長の給与や馬車の費用も6000リーヴルかかっていた、と述べた後、ローマから帰国した学生たちの救済のための年金を要求したのである。要望はその場で通り、政令が発布された<sup>39)</sup>。

公教育委員会は一週間で絵画彫刻アカデミー廃止についての回答を出すことは出来なかったが、これにより一気に王立諸アカデミー側には危機意識が高まった。7月17日にはラヴォワジエが公教育委員会に科学アカデミーを弁護する報告書を送付している。そして、ついに諸アカデミーの閉鎖決定によって決定的となる8月8日の国民公会での議論を迎えた。まず、国民公会でグレゴワール神父が報告し、具体的にアカデミー廃止のための法案を提案した。ただし、法案はラヴォワジエの意志を受けて、実質

上、科学アカデミーのみ存続を主張するものであった。

その時の演説は主に三つの内容から構成されていた。第一に、グレゴワールは文芸 (littéraires) アカデミーの不要論を唱えた。アカデミー・フランセーズや他の諸アカデミーは旧体制と深く関わっており、それゆえに亡命者も多く、既に機能不全を起こしているのだという。合わせてアカデミーの存在しなかった古代社会を引き合いに出し、自由な社会には文芸のアカデミーは不要という主張も行った。そして、第二の論点として、文芸と対比する形で科学アカデミーは技芸の発展や国富の増強に貢献し有用であるとした。そして第三に、「科学と技芸の発展のために」捧げられた新たな協会、すなわち実質上、科学アカデミーに相当する組織をすぐに設立してほしいと要求したのであった<sup>40)</sup>。

周知の通り、この科学アカデミーを実質上救う提案に反論し、全王立アカデミー廃止の演説を行ったのがダヴィドである<sup>41)</sup>。彼はまず、議員たちの感情に訴える呼びかけから始めた。

市民諸君、もし、皆さんの中に、全ての貴族の最後の避難所であるアカデミーを一挙に破壊することの絶対的な必要性を十分に納得していない人がいるのなら、どうかその人が一瞬でも聞く耳を持ってくれますように。私はわずかな言葉で、彼らの疑いをはらすように、彼らの感受性に訴えて判断を決意させるように努めます。

ただし、実際にダヴィドが演説で引き合いに出したのは、才能があるのに凡庸なアカデミー会員に苦しめられた若手画家の逸話ばかりである。それにも関わらず、「あるアカデミーを語ることは全てを語ることなのだ。全てにおいて常に同じ精神が宿っている。全てにおいて同じ種類の人々がいる」からだと言及し、巧みに自分の主張を一般化した。たとえば、「諸王の政治は王権同士の均衡を保つことだった。諸アカデミーの政治も才能の均衡を保つことなのです」と述べて、アカデミーという組織は国家同士の勢力均衡のように、ほどほどの才能を持つ人達が互いにけん制し合いながら出すぎた才能を押し戻すための場だ、という印象を議員たちに与えようとした。

だが、議論の粗さにも関わらずダヴィドの演説が場を制したのは、モンターニュ派がアカデミーの一挙廃止に好意的だったということに加えて、若手芸術家たちと行動していた彼自身の一貫性が周囲の人の心を動かした側面もあったのではないかと推察される。実際、後世の目からみても、ダヴィドの主張はグレゴワールに比べて、一切の功利的な調子を排したものである。また、この時、既にローマで別のアカデミー関連組織が暴動で破壊されており、その残骸を解体して今困窮している若手芸術家のために有効利用するという提案が現実的なものになっていた。破壊と再生の引き金がかかれたとの感覚を持った議員は少なくなかったのではないかと推察される。

この切迫感ある現状を前にして、科学アカデミーが強みとして主張できたのは未だ効果の図りづらい度量衡制定問題や、職人たちに恨まれながら進めた特許審査システム整備などであった。無論、戦時において比較的目に見える成果を上げていた火薬製造工程の改良といった事業もあった。だが、そのような技術的有用性の高いプロジェクトは、アカデミーという組織形態でなくとも遂行できてしまう。

事実、ダヴィドの演説のあとに、議場からはグレゴワールの政令案に「矛盾」があるとの指摘が出た。そしてこの日の審議では、提案されていた法のうち、全アカデミー廃止を決定する文面をまずは採択することになった。そして、他の部分、すなわちグレゴワールが提案した新たな科学と技芸のための協会（実質上の科学アカデミー後継組織）設立案については、議論を延期するという提案がなされた<sup>42)</sup>。その結果、先がどうなるのかは決まらないまま、一気に全てのアカデミーが閉鎖されてしまったのである。

## 結論に替えて——道徳と技芸 (art) のナショナリズム

「再生」する新しい国家において諸アカデミーはどのみち廃止される予定であった。だが、新しい組織として生まれ変わるのか、あるいは消滅するのかが定まっておらず、その未来は新たな公教育体制を議論する人々に委ねられていた。執行権力から独立

したアカデミーを想定したコンドルセ案のあと、財政難とそれを悪化させる外国との戦争、国内での肅清という極限状況において、アカデミーのような組織は共和国に必要なとする論調が主流になっていった。だが、公教育委員会の議論を確認する限り、モンターニュ派の委員たちも先になされた決定の踏襲や筋道だった主張を一定程度は気にかけていたように思える。

諸アカデミー閉鎖の決定につながる議論が議会で呼び込まれる直前、頻繁に廃止論が取りざたされていたのは絵画彫刻アカデミーであった。ただし、同アカデミーの廃止を願う運動は根強く続いていたが、それとモンターニュ派のイデオロギーだけでは一斉廃止の決定にはつながらなかった。むしろ、反革命感情の高まるローマで起きた偶発的な事件と、それにより関連組織のアカデミー・ド・フランスが実質上機能停止状態になったこと、困窮する若手画家たちが出現して財政的問題が強く意識されたこと、そうした一連の事象が積み重ねがあって、アカデミーの一挙廃止という大胆な提案を許す雰囲気は議会で醸成されていったのではなかろうか。

1793年8月8日の演説だけを切り取ると、全てのアカデミーに対して平等な閉鎖を求めるダヴィドの情熱的な雄弁だけが、科学アカデミーの「有用性」を訴える言説に勝利したかのようにみえる。ただ、この直後にモンターニュ派は医学校と技術系学校の即時的な開校を認めている。また、全ての高等教育組織を廃した一方で、公開講座を有していた二つの組織、自然誌博物館（旧王立植物園）と、コレージュ・ド・フランス（旧王立コレージュ）は存続させた。前者については、革命の際に自発的に改革を行った組織であり、自然誌はルソーを愛好するモンターニュ派の代議士も親しみを持っていたため、残っても不思議ではない。だが、後者は大した変革をせず、しかも言語や諸科学などあらゆる分野の講座を擁したため、閉鎖された諸アカデミー関係者の臨時避難場所となったにも関わらず消えなかった。すなわち、モンターニュ派の選択は、非常に短期的視野に立った実利主義に支配されていた一方で、最低限の学術と文化の保存を許すものであった<sup>43)</sup>。

一連の動きの中で影響力を奮った芸術家と職人たちの占める独特な位置についても最後に触れておきたい。本稿はアカデミー閉鎖という事象の経緯を追うことに専念したため、彼ら彼女らの理念や活動の

詳細、その社会的文脈についての検討は不十分である。だが、一つ言えるのは、彼らによる芸芸=芸術（art）の運動が、道徳的高揚感を伴いながらも、最終的には絶対王制ですら完全には意のままにはできなかったアカデミー組織の独立性を易々と突き崩していったという事実である。そのダイナミズムは見事であると同時に恐ろしい。

モンターニュ派の台頭と共に、フランス革命期の公教育論をめぐる議論が道徳教育をめぐる論争に彩られていくことはよく知られていた。いわゆる知育重視か徳育重視かという問題である。しかし、諸アカデミーの閉鎖をめぐる経緯を検証して改めて思うのは、それに加えて、芸術と芸芸におけるナショナリズムの原初的な姿も、この経緯の中に見いだせるのではないかということである。共にartである両者は、未だ近代的な芸術や工学にはなりきっていなかったが、それでも一瞬で精神を高揚させる絵画・彫刻や、手に触れられる実用的な機械などをもって人々に広く訴えかけ、容易に国民的な一体感を醸成し得た。それゆえ、やはりまだ形成期にあった諸学の近代的な専門性（expertise）<sup>44)</sup>や学術機関の独立性との間に激しい摩擦を生むことにもなった。このような葛藤の構図は、近代民主主義の学術と社会が今も抱える緊張関係を読み解く手がかりとなるように思われるが、その検討は今後の課題としたい。

## 注

- 1) 本研究はJSPS科研費20K00126の助成を受けている。また、東京大学大学院教育学研究科における2022年度の演習授業、高等教育・研究の歴史Ⅱおよび2023年度の高等教育・研究の歴史Ⅰで扱った内容および受講者との議論により着想を得た。議論に参加して下さった全ての方々にお礼を申し上げる。
- 2) Décret de la Convention du 15 septembre 1793.
- 3) Roger Hahn, *The Anatomy of a Scientific Institution. The Paris Academy of Sciences, 1666-1803*, Berkeley, Los Angeles, London, University of California Press, 1971, pp. 239-240.
- 4) Michael P. Fitzsimmons, *The Place of Words: The Académie Française and its Dictionary during an Age of Revolution*, Oxford, Oxford University Press, 2017, p. 86.
- 5) 美術史の関心からだと、ダヴィドより前に演説したグレゴワールが科学アカデミーを擁護したということすら

- 言及されない場合がある。例えば次。Nicholas Mirezoeff, "Revolution, Representation, Equality : Gender, Genre, and Emulation in the Académie Royale de Peinture et Sculpture, 1785-93", *Eighteenth-Century Studies*, Winter, 1997/1998, Vol. 31, No. 2, pp. 153-174. 日本語では次の論文がダヴィドの政治的活動については詳しいが、アカデミーの廃止に関する箇所は一次史料からの独自の記述になっている。貴傳名暁子「フランス革命期における政治と美術——ジャック・ルイ・ダヴィッドの活動を中心に——」『史窓』2004年、61号、p. 168.
- 6) Cécil Robin, *Au purgatoire des utilités. Les dépôts littéraires parisiens (an II-1815)*, thèse pour obtenir le grade de Docteur de l'Université Paris-Sorbonne, sous la direction de Dominique Margairaz, 2013.
- 7) フランソワ・フェレ、モナ・オズーフ『フランス革命事典 5 思想 I』河野健二、阪上孝、富永茂樹監訳、みすず書房、2000年、206-223頁。同『フランス革命事典 4 制度』1999年、157-184頁
- 8) フランス語ではrechercheが「学術研究」の意味になったのは1798年と1835年の間である。*Dictionnaire de l'Académie française*, 6<sup>e</sup> édition, 1835 [http://www.dictionnaire-academie.fr/article/A6R0470]. 教育と研究の連続性については次。Laurence Brockliss, "Science, the Universities, and Other Public Spaces: Teaching Science in Europe and the Americas", in *The Cambridge History of Science*, Roy Porter. ed., Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2003, Vol. 4, pp. 44-86.
- 9) *The Place of Words*, pp.62-64.
- 10) Archives Nationales, F<sup>1</sup> 1022: Décret de l'assemblée nationale du 20 août 1790, ff. 1r-2r. 他の三アカデミー(絵画彫刻、建築、オペラ)はこの史料には記載がない。
- 11) 科学アカデミー会員であるグランベール、コンドルセ、バイイ、ピュフォンなども科学を題材にした文筆の著作によりアカデミー・フランセーズを目指し、実際に席を獲得している。科学と文芸の境界の曖昧さもあった。
- 12) Archives de l'Académie des sciences, PV 1792 : « Dépenses de l'Académie des sciences », f.1r-v.
- 13) 「動物磁気」という疑似科学的な理論と催眠療法で一斉を風靡したフランス・アントン・メスマーが、科学アカデミー学者を中心とする調査委員会にその妥当性を否定されると、メスマーの支持者たちもこの列に加わった。Charles Coulston Gillispie, "The *Encyclopédie* and the Jacobin Philosophy of Science: A Study in Ideas and Consequences", in *Essays and Reviews in history and History of Science*, Gillispie, American Philosophical Society, 2006, p. 132, <https://www.jstor.org/stable/20020411> [reprinted from Marshall Claggett ed., *Critical Problems in the History of Science*, Madison, University of Wisconsin Press, 1959, pp. 255-290].
- 14) Jean Paul Marat, *Les charlatans modernes, ou lettres sur le charlatanisme académique*, Paris, 1791.
- 15) Gillispie, "The *Encyclopédie* and the Jacobin Philosophy of Sciences", p. 132.
- 16) Christiane Demeulenaere-Douyère, « Inventeurs en Révolution : la Société des inventions et découvertes », *Documents pour l'histoire des techniques* [En ligne], 17 | 1er semestre 2009, mis en ligne le 06 avril 2011, consulté le 04 juin 2023. URL : <http://journals.openedition.org/dht/483> ; DOI : <https://doi.org/10.4000/dht.483>
- 17) 芸術家たちが革命に熱心になった背景には、かつて絵画や彫刻を購入していた貴族たちの亡命により直接の経済的打撃を被っており、革命政府という新たな庇護者に自発的に迎合する動機があったとも言われる。貴傳名「フランス革命期における政治と美術」。Brigitte, Demeure, « Art et propagande révolutionnaire : du peintre J.-L. David (1748-1825) à l'écrivain communiste E. Cabet (1788-1856) », *Topique*, vol. 145, no. 1, 2019, pp. 93-108.
- 18) Assemblée nationale législative, *Procès-verbaux du Comité d'Instruction publique de l'Assemblée législative*, publiés et annotés par M. J. Guillaume Paris, Impriemrie nationale, 1889, pp. 1. 188-passim [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k46892x]. 邦訳は次。コンドルセ「公教育の全般的組織についての報告と法案」『フランス革命期の公教育論』所収、阪上孝編訳、岩波書店、2002年、9-107頁。渡辺誠訳『革命議会における教育計画』岩波文庫、1949年。石常常世『フランス公教育論と市民育成の原理——コンドルセ公教育論を起点として——』風間書房、2013年、第4章。
- 19) Elisabeth Badinter et Robert Badinter, *Condorcet. Un intellectuel en politique*, Paris, Fayard, 1990, pp. 456-460.
- 20) *Ibid.*, pp. 461-467.
- 21) 次から閲覧可 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1063582b>; <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k10635845>
- 22) *Journal des débats et de la correspondance de la Société des amis de la Constitution*, séante aux jacobins à Paris, No. 187, 1<sup>er</sup> mai, 1792, p. 4 (演説自体は4月29日のもので続きとして掲載されている)。

- 23) 科学アカデミーについては隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋大学出版会、2011年、第8章で引用した文献を参照。
- 24) Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique de la Convention nationale*, publiés et annotés par M. J. Guillaume, t. 1 : 15 octobre 1792-2 juillet 1793, Paris, Imprimerie Nationale, 1891, p. 82 [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k29288b].
- 25) *Ibid.*, p. 81.
- 26) *Ibid.*, p. 87.
- 27) Anatole de Montaignon et Jules Guiffrey éd., *Correspondance des directeurs de l'Académie de France à Rome avec les surintendants des Bâtiments, publié d'après les manuscrits des Archives Nationales* (t. XVI, 1791-1797), Paris, 1907, lettres 9316, 9317, et 9329, pp. 146-147, 163-164.
- 28) 公教育委員会議事録を19世紀末に編集した歴史家、M. J. ギョームも、団体に所属しない独立芸術家たちのアカデミー廃止要求が強かったと解説している。Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique*, t. 2 : 3 juillet 1793-30 brumaire an II (20 novembre 1793), p. 242 [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k29289p].
- 29) Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique*, t.1, pp. 87-88.
- 30) *Ibid.*, p. 89.
- 31) Charles Gibert Romme, *Rapport sur l'instruction publique, considérée dans son ensemble, suivi d'un projet de décret sur les principales bases du plan général*, présenté à la Convention Nationale, au nom du Comité d'instruction publique, L'imprimerie nationale, s.d. [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k4232483c]. 邦訳は次。ロム「公教育に関する報告」『フランス革命期の公教育論』111-154頁。
- 32) Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique*, t.1, pp. 237, 241, 442. Patrice Bret éd., *Œuvres de Lavoisier. Correspondance*, Volume VII : 1792-1794, Paris, Hermann, 2012.
- 33) Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique*, t.1, pp. 461-463.
- 34) 1792年11月に絵画彫刻アカデミーが正式に選出した院長は直後に廃されたため、フランス共和国政府が派遣した外交官バッセヴィルが臨時の院長をしていた。だが、彼がアカデミーの建物正面にあったブルボン王朝の紋章を共和国のものにしようとしたことが、反カトリック的な革命を嫌うローマ市民の逆鱗に触れ、彼は殺害された。画学生たちも襲撃を受け、アカデミーの建物も激しい損傷を被った。Correspondance des directeurs de l'Académie de France à Rome, p. 219. Mehdi Korchane, « L'assassinat de Bassville à Rome », *Histoire par l'image* [en ligne], consulté le 03/06/2023. URL : [histoireimage.org/etudes/assassinat-bassville-rome](http://histoireimage.org/etudes/assassinat-bassville-rome) これに先立つ2月22日に、ダヴィドはローマにおけるフランス人画学生たちの窮状を調査する指令を受けていた。
- 35) Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique*, t.1, pp. 355, 461.
- 36) 経緯を捕捉すると、モンターニュ派はこの時外国軍との戦闘においてフランスから派兵されていたジロンド派の軍人、デュムリエ将軍が国外で敗北したことを厳しく追及していた。同時期にモンターニュ派が人選を支配する革命裁判所の成立、反革命派への人権の停止などが進んでいたため、危機を感じたデュムリエ将軍はオーストリアに下った。このことはモンターニュ派がジロンド派を裏切り者として攻撃する材料となった。それに対し、議会で多数派を保っていたジロンド派は、モンターニュ派こそ反革命勢力と批判し、モンターニュ派に近いパリ・コミュン関係者数名の逮捕に及んでいたのである。このことが、パリ・コミュンによる武装蜂起を決起させ、前述の要求へとつながった。Badinter et Badinter, *Condorcet*, chapitre IX.
- 37) たとえば *Archives Parlementaires de 1787 à 1860*, t. LXVII, 24 juin 1793, p. 278.
- 38) Convention Nationale, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique*, t. 2, pp. 242-243.
- 39) L. Lataste et al. éd., *Archives Parlementaires de 1787 à 1860, recueil complet des débats législatifs et politiques des chambres françaises*, première série (1787 à 1799), tome LXVIII, du 1er au 14 juillet 1793, Paris, 1905, p.31.
- 40) *Archives Parlementaires de 1787 à 1860*, t. LXX du 30 juillet au 9 août 1793, Paris, 1906, pp. 519-523.
- 41) *Ibid.*, pp. 523-524.
- 42) *Ibid.*, p. 524.
- 43) L. Pepe, « Il Collège de France durante la rivoluzione francese. Due memorie apologetiche », *Nuncius*, 1996, 11, pp. 3-41 [https://doi.org/10.1163/182539196X00808]. Charles Coulston Gillispie, *Science and Polity in France. The Revolutionary and Napoleonic years*, Princeton, Princeton University Press, 2004. Jean-Luc Chappey, *Des naturalistes en Révolution. Les procès-verbaux de la*

*Société d'histoire naturelle de Paris (1790-1798)*, Éditions du Comité des travaux historiques et scientifiques, Paris, 2009, pp. 15-57.

- 44) この「専門性」の含意については次で説明した。隠岐さや香「『科学と『専門家』をめぐる諸概念の歴史』」「『専門家』とは誰か』村上陽一郎編著、晶文社、2022年、53-75頁。